

25.6.5 6月日本子ども宣教局伝道学校：6月学院福音化

「聖霊の導き」

6月学院福音化の大きなタイトルを「聖霊の導き」としました。

聖書は神様のみことばです。その聖書は何を語っているのでしょうか。ただイエス・キリストを語っています。旧約は来られるメシア、新約は来られたキリスト。

ヨハネ 5章 39節に、「その聖書は、わたし（イエス・キリスト）について証ししているものです」と言われています。

ヨハ 5:39

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。

そのイエス・キリストを私たちは福音だとも言います。ローマ 1章 2節から 4節、最初の部分と終わり部分を見れば、福音は主イエス・キリストだと語っています。

ロマ 1:2～4

——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として 公 に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

福音はイエス・キリストだということです。では、なぜイエス・キリストを福音と言うのでしょうか。

十字架を通して、過去、現在、未来のすべての問題を終わらせてくださったからです。救われた神の子どもは、信仰によって、その事実を信じて告白することになりました。ところで、その信仰さえも神様の恵みのプレゼント（賜物）として 私たちに与えられたのです。この地に生きているすべての神様の民は、永遠の神の国に向かって流れているところです。永遠の神の国に流れて行っている恵みの川の上に聖霊という船に乗って行きます。私 がその船の中でいっしょうけんめいに漕ぐ必要はありません。そのまま流れて行くようになっています。宇宙の惑星に飛んでいく銀河鉄道999ではなく、天国行きの救いの列車に乗っているのです。その船や、その列車の中では私 がすることができるのは、単にからだを任せるだけなのです。また、神様がなさることを見れば良いのです。

今月の学院福音化も先月に引き続き使徒の働きのみことばです。ですから、先月のみことばを少しもう一度見ましょう。カルバリの丘、オリーブ山、マルコの屋上の部屋の道しるべでした。

カルバリの丘の道しるべは何だったのでしょうか。イエス様が行かれた十字架の道、その道しるべでした。

オリブ山の道しるべは、十字架を通して完成して開いてくださった神の国の道しるべです。その神の国と
いうことは、統治です。それゆえ、私たちは従順にするのです。イエス様が従順にされて十字架にかか
られたように。そのように、イエス様が生きられた生き方を通して現れた、この道しるべに従って、私た
ちは同じように生きるようになっていきます。ところで、その道は決して簡単ではないのです。
それゆえ、マルコの屋上の部屋の道しるべという、聖霊が導いて行ってくくださるという約束をくださった
のです。

この三つのことを心にとめてから、6月の学院福音化のみことばを見ましょう。

そのように聖霊の導きに引っ張られて生きて行った者の証拠が記録されたのが、使徒の働きです。彼らの
生き方は、イエス様が自分を否定し十字架を負う生き方だったです。使徒の働き（使徒行伝）を、よく他
の言葉で「聖霊の働き（聖霊行伝）」だとも言います。聖霊が行われた行跡を記録したということです。

1課から5課までを説明しますが、1課だけ少し集中して見て、あとは簡単に見ます。

1課 アジアの道しるべ（使13:1-4）

使徒の働き 13章 1～4節

01 さて、アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキ
オ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。

02 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わた
しが召した働きに就かせなさい」と言われた。

03 そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。

04 二人は聖霊によって送り出され、セレウキアに下り、そこからキプロスに向けて船出し、

2節と3節に、たしかに、聖霊が彼らを導いて、聖霊によって送り出された、このように言われています。

聖霊がされたのです。聖霊の導きというのは、私の思い（願い）を成し遂げるために助けてくださるとき
まで、ねだることではなく、聖霊が導いてくださるときまで待つことです。ご飯を食べずに、どうにかして
くださいと言ってねだるのではなく、聖霊の導きを待つのです。そのときにはじめて聖霊が働かれ、導い
ていってくださいます。そのようにして聖霊の導きにしがたって行くときに、神様が備えられた人にも会う
ようになって、神様が備えられたことも起こるようになります。良いことでも、苦難であっても、それが神様
の導きであることを知るようになります。神様が備えられた場所に引っ張られて行くようになっているので
す。私が先に人を見て、場所を見て、なにかことを見て判断するのではないということです。私がサミット
タイムを一生懸命にして、300%専門性を備えて、祈りで準備ができたときにはじめて、「よし！よくやっ
た」と聖霊がそのときに導かれて行くではありません。約束された聖霊が私の中に来られれば、サミッ
トタイムもすることができるようになり、300%でも1000%でも専門性も備えるようになっていて、祈りも
できる状態に作ってくださるようになるのです。どちらがさらにはやくて正確でしょうか。私がすべて準備

を完^{かん}ぺきにしてから聖^{せい}霊^{れい}に導^{みちび}かれるのと（そのようにできるかも分^わかりませんが）、聖^{せい}霊^{れい}が導^{みちび}いて行^いってくださる中で、一つ^なつ一つ^{ひと}なされて行くことと。
「聖^{せい}霊^{れい}が言^いわれた」「二人^{ふたり}は聖^{せい}霊^{れい}によって送^{おく}り出^だされ」

2課 マケドニアの道^{みち}しるべ（使^し16:6-10）

使^し徒^との働^{はたら}き 16 章 6～10 節

06 それから彼^{かれ}らは、アジ^あアでみことばを語^{かた}ることを聖^{せい}霊^{れい}によって禁^{きん}じられたので、フリュギア・ガラテヤの地^ち方^{ほう}を通^{とお}って行^いった。

07 こうしてミシアの近^{ちか}くまで来^きたとき、ビティニアに進^{すす}もうとしたが、イエスの御^み霊^{たま}がそれを許^{ゆる}されなかつた。

08 それでミシアを通^{とお}って、トロアスに下^{くだ}った。

09 その夜^{よる}、パウロは幻^{まぼろし}を見^みた。一人^{ひとり}のマケドニア人^{じん}が立^たって、「マケドニアに渡^{わた}って来^きて、私^{わたし}たちを助^{たす}けてください」と懇^{こん}願^{がん}するのであった。

10 パウロがこの幻^{まぼろし}を見^みたとき、私^{わたし}たちはただちにマケドニアに渡^{わた}ることにした。彼^{かれ}らに福^ふ音^くを宣^{のたま}べ伝え^{つた}えるために、神^{かみ}が私^{わたし}たちを召^めしておられるのだと確^{かく}信^{しん}したからである。

6 節と 7 節見ると、聖^{せい}霊^{れい}が禁^{きん}じられた、許^{ゆる}されなかったのです。聖^{せい}霊^{れい}が禁^{きん}じられて、許^{ゆる}されなかったら、だれがそこに突^つき進^{すす}むことができるでしょうか。その道^{みち}をふさいで新^{あた}しい道^{みち}を開^{ひら}かれるなら、だれがそれを拒^き否^{よひ}することができるでしょうか。そのようにして、聖^{せい}霊^{れい}の導^{みちび}きにしがたって行^いったので、また、神^{かみ}様^{さま}が備^{そな}えられた場^ば所^{しょ}と人^{ひと}とことがなされるのです。マケドニア地^ち方^{ほう}の主^{しゅ}要^{よう}な町^{ちょう}で植^{しょく}民^{みん}都^と市^しのピリピに行^いきました。そこに行^いったら、神^{かみ}様^{さま}が備^{そな}えられたリディ^りアとの出^で会^あいがあり、リディ^りアの家^{いえ}がまた、教^き会^{うかい}として用^{もち}いられます。そのあと、悪^{あく}霊^{れい}につかれた女^{おんな}を癒^いやす事件^{じけん}によって、投^{とう}獄^{ごく}されるようになったのですが、看^{かん}守^{しゆ}とその家^か族^{ぞく}が救^{すく}われるようになったのです。それがすべて聖^{せい}霊^{れい}の導^{みちび}きによってなされたことです。

3課 ローマの道^{みち}しるべ（使^し19:21）

使^し徒^との働^{はたら}き 19 章 21 節

これらのことがあつた後^{あと}、パウロは御^み霊^{たま}に示^{しめ}され、マケドニアとアカイ^あアを通^{とお}ってエルサレ^いムに行くことにした。そして、「私^{わたし}はそこに行^いってから、ローマも見^みなければならぬ」と言^いった。

「私^{わたし}はそこに行^いってから、ローマも見^みなければならぬ」とパウロが話^{はな}しましたが、実^{じつ}は韓^{かん}国^{こく}語^ご聖^{せい}書^{しょ}を見^みれば、「御^み霊^{たま}に示^{しめ}され」という言^{こと}ばが抜^ぬけています。「このことの後^{あと}にパウロがマケドニアとアカイ^あアをへてエルサレ^いムに行くことを決^{けつ}意^いした」となっています。そしてその後^{あと}に、「ローマも見^みる」となっています。重^{じゅう}要^{よう}な単^{たん}語^ごを抜^ぬいたのです。その告^{こく}白^{はく}をされた方^{かた}は、聖^{せい}霊^{れい}です。パウロがこのような信^{しん}仰^{こう}の告^{こく}白^{はく}をしたので、神^{かみ}様^{さま}が感^{かん}動^{どう}してパウロの言^{こと}ばを引^{いん}用^{よう}したというのは、誤^{あや}ま^まな解^{かい}釈^{しゃく}です。すでに神^{かみ}様^{さま}の計^{けい}画^{かく}の中^{なか}にあったことを

聖霊の導きによって告白するようになったということです。それゆえ、19章21節、23章11節にもあります。

使徒の働き 19章21節

これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを^{とお}通ってエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

使徒の働き 23章11節

その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならぬ」と言われた。

人がしたことが、神様がなさったことなのか、これをよく区分してください。

4課 恐れることはありません、パウロよ（使27:24）

前の3課に続く内容でしょう。24節だけ見れば、明らかではないのですが、23節に確かに記録しています。

使徒の働き 27章23～24節

23 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、

24 こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』"

神の御使いが私のそばに立って「あなたは必ずカエサルの前に立ちます」

皆さんすべてがカエサルの前に立った者です。アメリカのトランプ大統領の前に立つということではなく、どこかの国家元首、大統領、王たちの前に立つという話ではありません。なぜ皆さんがカエサルの前に立った者なのでしょう。世の中のすべての人々は、自分が王のように生きているでしょう。神のように自ら王になって生きています。今日一日を生きてきて、皆さんの周囲にいるすべての未信者がみなカエサルなのです。自分しか分からない王です。皆さん、恐れることなく、皆さんに与えられた、そのすべての出会いの中で、神の子どもの大胆さを現してください。

5課 ローマ福音化の弟子たち（ロマ 16:25-27）

ローマ人への手紙16章に出て来る人物のニックネームが出て来るのですが、7つのニックネームは聖霊の導きと働きによって、それぞれに与えられた役割をしたということです。彼らがはじめからこのようになるべきだ、あのようなになるべきだ、そのようにしたではありません。神様がどのように用いられるのかは

わかりません。私たちが祈るべきなのは、「私は家主として」「私は同胞として」また、何か、そのように祈るのではありません。神様が私をどのような者として用いられるのかを祈なければならないのです。

エペソ4章にその部分をよく記してあります。頭であるキリストのからだを建て上げるために、私たちをからだの各部分として、役割を生きていだけなのです。エペソ4:1でパウロは、このように話します。「さて、主にある囚人の私はあなたがたに勧めます。あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」7節には「しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました。」ある者には1つのタラント、ある者には2つのタラント、ある者には5つのタラントを与えられます。12節で結論を語っています。「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」神様の完ぺきな召し、それに従順にすれば良いのです。

結論です。

神様はすでに完ぺきなシナリオを組んでおられます。必要なすべてのセットを作っておかれ、必要なエキストラもみな準備しておかれました。神様の作品の主人公は、ただイエス・キリストだけです。私たちはセットの一部分として用いられるのか、通り過ぎるエキストラとして用いられるのかはわかりません。ただ私たちの生活はイエス・キリストがあらわれる、さらに、あらわれるようになることに用いられるだけなのです。

旧約の預言書を見れば、神様のみことばが〇〇に臨んだ、このようなことばがたくさん出て来ます。みことばを受けたその預言者が主人公でなく、そこに臨んだ神様のみことばが主人公です。神様が、どんなみことばを伝えさせて、そのみことばがどのように成就されたかを見なければなりません。ところで、私たちは聖書を読んだり、みことばを聞いたりする時に、そのままそのストーリーにだけとても集中してしまいます。

たとえば、出エジプト記を見ると、映画にも出て子どもたちのアニメーションでもたくさんありますが、見ると、神様のみことばが何かに集中していなくて、一場面一場面、そのストーリーにとっても集中しています。たとえば、モーセをナイル川に置くときの場面とか、聖書にはたくさん書かれていません。しかし、そこに、とても多くの私たちの人間的な人間味あふれるストーリーを入れるのです。10のわざわいも同じです。聖書を見てみると、その10のわざわいについて説明しているのは、数節しかありません。ところで、それを映画やアニメーションで作っているでしょう。とてもスペクタクルに、感動するように作り出します。紅海が分かれることも同じで、聖書には1節に書いてあるだけです。「モーセが手を海に向けて伸ばすと、主は一晩中、強い東風で海を押し戻し、海を乾いた地とされた。水は分かれた。」（出14:21）ところで、それをもうみな中間に説明をして映画で作り出すのです。風が吹くことから始めて。だんだん壁になる場面とか、アニメーションで思い出すのは、その壁になった水にサメが来たり、とにかくこのように周辺のこと、ストーリーにだけとても集中してしまうのが私たちだということです。本来、出エジプトを通して神様が語ろうとされるメッセージは何でしょうか。不可能な人間に絶対可能な神様が働かれるということでしょう。羊の血を通して救いを成し遂げるということでしょう。使徒の働きも、数多くの使徒の行跡が

記録きろくされていますが、そこで重要じゅうようなことは、彼らかれが何なにをしたのが重要じゅうようなのではありません。偉大いだいな伝道者でんどうしゃパウロがどのようにした、それが重要じゅうようなのでなく、パウロが聖霊せいれいの導みちびきをどのように受けたのか、また使徒しとの働はたらきは続つづくというでしょう。29章以降しょういこうに、私わたしたちに与あたえられました。今いまも続つづいて書かかれています。それは、人ひとの働はたらきが書かかれているわけではありません。聖霊せいれいが働はたらかれた、聖霊せいれいが導みちびかれた、その働はたらきが記しるされているのです。

今月こんげつもその聖霊せいれいの導みちびきの中で、その流ながれの中なかにからだを任まかせて、従順じゅうじゆんにして生いきる1か月げつになるように祝しゅくふく福ふくします。